公現後第２主日礼拝説教「あなたはどなた？」予稿

日本基督教団石神井教会　2026年1月18日

【使徒書日課】使徒言行録　9章1～20節

1さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭
司のところへ行き、2ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道
に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行する
ためであった。3ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、
天からの光が彼の周りを照らした。4サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、
なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。5「主よ、あなたは
どなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害してい
るイエスである。6起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知
らされる。」7同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えない
ので、ものも言えず立っていた。8サウロは地面から起き上がって、目を開け
たが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。9
サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

10ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「ア
ナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。
11すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、
ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈
っている。12アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり
目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」13しかし、アナニアは
答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たち
に対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。14ここでも、御
名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けていま
す。」15すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、また
イスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。
16わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に
示そう。」17そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの
上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてく
ださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊
で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」18すると、た
ちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようにな
った。そこで、身を起こして洗礼を受け、19食事をして元気を取り戻した。

サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、20すぐあちこちの
会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。

【福音書日課】マルコによる福音書　1章14～20節

14ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝
えて、15「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と
言われた。
16イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモン
の兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。
17イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言わ
れた。18二人はすぐに網を捨てて従った。19また、少し進んで、ゼベダイの子
ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になる
と、20すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと
一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

ご覧いただく【こども説教のために】

日曜日の朝、わたしたちは、それぞれの家から教会へと呼び集められて来ました。昼まで寝ていてもよかったのに、他の用事のために出かけてもよかったのに、日曜日の教会に来て、礼拝に加えられています。神の御前に進み出る者とされているのです。

ここで、わたしたちは、自分のことを神にご覧いただいています。いつもの生活の中では隠そうとしていたかもしれない自分の姿を、神の御前にご覧いただくのです。そのために、ここに集められていると言ってもよいかもしれません。

もちろん、神は、いつでもわたしたちのことをご覧くださっているでしょう。見ていてくださっているでしょう。ただ、わたしたちは、いつもそのことを気にかけずに生活してしまっています。普段は、神なしでも平気な生活を送っているのです。

そのようなわたしたちが、どういうわけだか、日曜日の教会に集められて来ました。神の御前に立つようにされて、神に自分の姿をご覧いただこうとしているのです。自分の姿が立派だからではありません。ただ、今日は、呼び起こされ、連れ出され、ここに集うようにされました。寝床にいたわたしたちを呼び起こし、連れ出し、集めてくださる方があったのです。

わたしたちは、そのお方のことを「主イエス」とお呼びします。最初の弟子となった四人の漁師のことをじっとご覧くださり、お呼びくださり、ご自分の行く道に連れ出してくださり、「神の国」に生きる人生へとお導きくださったお方です。主イエスは、その弟子たちの歩みに触れた者のことをもご覧くださり、お呼びくださり、ご自分の行く道に連れ出してくださり、「神の国」に生きる人生へとお導きくださっているのです。

お呼びいただく

昨日と今日、全国で行われている大学入学共通テストには、50 万人の若者たちが臨んでいると報道されていました。18 歳人口の半数に近い人たちが、一斉に試験に臨んでいます。大学進学が特別なことでなくなって久しいとはいえ、一人ひとりにとっては、人生の道を左右するときであることは間違いありません。家族や周囲にそのような者が一人でもいれば、しばらくは落ち着かない日々が続きます。もちろん、大学入試で人生の道が決まってしまうわけではありません。人生の分かれ道を、わたしたちは皆、生涯のうちに幾度も経験しなければならないものです。

わたしは、30 年前の 4 月に、それまで続けていた生物学の研究者になる道を離れて、神学校に進みました。研究者の生活が嫌になったからではありません。適性があったかは分かりませんが、好きで続けてきたことでしたから、神学校の入学式に臨んだ前日まで、所属していた学会の大会に参加し、自分の研究発表もしていました。けれども、その学会発表を最後に、在籍していた大学院は退学し、研究生活も打ち切りにして、神学生としての生活を始めたのです。そうしようと決心してから、すでに 9 カ月が経っていました。さらに後から振り返ってみれば、決心する半年前から、わたしは、どこからか呼びかけてくる声を無視できなくなっていたのです。31 年前の 1 月 17 日に発災した阪神淡路大震災は、確かに、わたしに呼びかける声の響きがあったことを辿れる大きな出来事であったのです。

昨年末の降誕祭で、わたしは受洗 40 年となりました。それから 10 年を経て神学校に進むことになるとは、想像できないことでした。そのころ母教会で主任牧師のもとで働かれていた若い副牧師は、青年たちにしばしば「神学校に行かないかい？」と誘っていましたが、わたしはその対象とは見られていなかったのか、一度も誘われることはありませんでした。主任牧師も、青年たちに、神学校に進んで牧師になるようにと励ますことはなく、むしろ、キリスト者として社会の中で一流の生き方をすることで証しすべきだと教えられていました。わたしが研究者を目指したのも、ただ研究が好きだったというよりも、自分に与えられたもののなかで一流を目指せば当然と思われた道を選んでいるだけのことだったのです。そこで積み上げてきたことに誇りもあれば、こだわりもありました。それでも、それらのことを手放して、そこから自由になって、新たな人生の扉を開かせていただくことになったのです。どこからかお呼びくださる御声が、確かなものとなっていたのです。

それは、大きな決断というよりも、小さな分かれ道の選択です。今日、教会に行くのか、それとも家にいるのか、仕事場にいるのか。手放せなかったものを、少しの時間手放してみたらどうだとの呼びかけに応えた選択です。

「あなたはどなたですか？」

教会へと導かれ、主イエス・キリストの行かれた道を辿りながら、その歩みに従って行こうという、わたしたちの生き方は、本当のところ、それほど大それたことでもないし、立派なことでもないのかもしれません。

もちろん、立派なキリスト者はたくさんいらっしゃいます。キリスト者として尊敬できる先輩方を、わたしもたくさん見てきました。生まれたときから教会に出入りしてきた者にとって、教会につながり続けてきた最大の理由は、尊敬できる先輩が教会にいてくださったからだと思います。子どもの頃、教会に来る子どもたちのことを全力で相手してくれる大人たちを見てきました。その大人たちの多くが、月曜日から土曜日までの生活でどれほどハードな仕事をなさっているのかを知るようになったのは、自分自身が将来のことを考えるようになってからのことでした。わたしの両親もそうでしたが、教会の先輩方は異口同音に、日曜日の教会生活が続けられるように自分の仕事を選んできた、と言うのです。もちろん、日曜日に教会を休まなくてもよい仕事を選ぶというのは、だれにでもできることではないでしょう。職種によっては、どうしても日曜日に出勤しなければならないこともあるでしょう。そういう人のことを否定しているわけではないのです。ただ、自分自身はそうしてきたという先輩方の姿を見ながら、わたしは、教会で育てられました。そのような先輩方に見守られながら、教会に留まり続けてきました。「この人たちと一緒に人生を生きたい」と、素直に思っていたのです。

主イエスの呼びかけに応えて、主イエスの人性の旅に伴うことになった四人の漁師たちは、**網を捨て、父…を雇人たちと一緒に舟に残して**、後について行きました。彼らは、成功した漁師たちだったはずです。町に立派な家もあり、雇人たちを雇う経営者一家の跡取りでした。そのことに、人生のすべてを集中することもできたのでしょうが、それを手放してみたのです。そうさせる呼びかけが、彼らに聞こえたからです。仕事から離れ、しがらみから自由になったところで、主イエスによって別の世界を見せていただいたのです。そこに、新しい使命を見いだしました。

彼ら主イエスの弟子となった者たちの教会が続けてきたことは、結局、主イエスがなさったことに他なりません。ひとりの者に目を向け、呼びかけ、自分自身の人生の道の一部を、その人と共に行くのです。

主イエスの行かれた道を、わたしたちも、辿ります。先達がすでに歩んだ道を、わたしたちも歩みます。先達の呼びかける声に耳を傾けます。先達を通してわたしに呼びかける小さな御声に耳を傾けます。「**あなたはどなたですか**」と問います。お応えくださるお方に問います。先達と共に問い、共に歩む友と共に問います。そこに、ただ一人のお方の姿を見いだすでしょう。